



日記「少数意見」

－ 9 スポーツ編 －

JUN

2001年11月6日(火) クローザー

昨日ニューオータニのとんかつ屋でカウンターに腰かけて牡蠣フライ定食を食べながらワールドシリーズ第7戦を見ていた。9回裏クローザーのリベラがマウンドに上がった。

定食を食べ終わった頃、リベラは1点を取られ試合は2-2のタイになっていた。リベラは死球を与え、一死満塁になった。その時リベラの顔には何とも言えない表情が浮かんだ。

恐れ、苦悩、諦め・・・何れでもない。重く強い潮流に捕らえられ、意図する方向に身体が動かない。そして、流れが向かう先に死を認めた時人は何を思うか。静かな悲しみ・・・

敵地での9回裏のクローザーには、悲劇の条件が揃っている。点を取られたらゲームオーバー、負けだ。先発投手だったら、次の回に味方が点を取ってくれるかもしれない。9回裏のクローザーは違う。味方にどんな強打者がいようとも、点を取られればその出番はない。リベラは孤独なボクサーだった。そして敵は塁を埋め、更に続々と登場する。

テレビの音は店の雑音で掻き消され、無声映画を見るようだった。小さなテレビの画面は、大観衆が立ち上がり、叫び、拍手をし、津波のようにリベラに襲い掛かる様子を捉えていた。リベラは、抗し難い流れの先に何があるかを確かに見たのだろう。

終止符は、劇的なホームランではなく、平凡なポテンヒットだった。それは悲劇の終幕というより、巷のありふれた死のアナロジーだった。リベラの姿はテレビの画面から消え歓喜の祭りだけが延々と続いていた。

2002年6月11日(火) W杯

日本が決勝T進出する可能性が高くなってきた。韓国の場合は最後の相手がポルトガルなので厳しい。日本が残り韓国が落ちたらどうなるだろう。

韓国はサッカーでは日本の先輩であり、今度のW杯でも国をあげての応援をしている。そして韓国と日本との関係は複雑である。そんななかで共同主催国の一方が決勝Tに残り他方が落ちるとなるとしこりが残るだろう。先日書いたように、韓国の日本に対する怨念を考えると、韓国が日本よりちょっといいところまで行くのが望ましい。日本はそのような結果になってもこだわらない

だろ。3日もたてば野球に関心が移っていく。

そもそもW杯が国単位である必要があるのであろうか。ロシアでの暴動からも分かるようにこれをスポーツではなく擬似戦争と考えている輩が多い。負ければ戦争に敗れたように勝者に対する憎しみが残る。

大遅刻してきたカメルーンとキャンプ地となった大分県の中津江村の交流をみて思ったのだが、チームをシャッフルして、各国は自国にキャンプを張った多国籍軍であるチームを応援したらどうだろう。予選まではこれまでと同じで32カ国が選ばれる。次にW杯組織委員会は全チームをポジションごとにシャッフルして多国籍のチームを作る。これらのチームが32の国に配属される。各チームは配属国でキャンプを張り調整する。監督も同様にいずれかのチームがあてがわれる。キャンプの期間は1、2ヶ月とし、その間各チームは配属国の国民と交流する。

われながら名案だと思うがいかがだろう。

2002年6月27日(木) 続W杯

韓国がドイツに敗れてよかったと思っている。韓国が嫌いなのではなく（ハングル講座を毎週見ているユン・ソナちゃんを見るのが楽しみ）、日韓の友好のためにはそれがよかったのだ。

韓国が決勝に残って横浜に来たとする。決勝となると、それまで韓国を応援してきた日本人の中にも嫉妬心が芽生えてくる。韓国チームが上に行けば行くほど相対的に日本代表チームの評価は下がってくる。あんなに喜んだ日本の歴史的快挙はなんだったということになる。

韓国の人にとってはどうだろう。横浜に乗り込んでいくことには、1910年の日韓併合以来の積年の恨みをはらすという側面がある。勝者として日本の地を踏むということは多くの韓国人が抱きつづけていた夢ではないか。喜びのあまり、無意識に日本人を見下す態度をとる。

決勝戦当日、横浜には赤シャツの韓国サポーターが結集する。もともと多くの在日韓国人がいるからホームと変わらない。全国の韓国人の多い地域では、テレビの前に韓国人サポーターが集まる。韓国人の興奮が増すのに反比例して日本人の気持はさめていく。そして次第に反感に変わる。

この状況を奇貨として、日本の極右団体が行動をおこす。彼らは兵隊を二つのグループに分ける。まず、青シャツの日本サポーターを装った一団が横浜国際総合競技場の周りに集まった韓国人サポーターを襲撃する。その直後、赤シャツを着た別な一団が横浜の商店街を襲う。そして、韓

国人フリーガンが暴動を起こしたというデマがインターネットで流される。騒乱は瞬く間に全国に広がる。関東大震災の後の惨劇が再現される。

という可能性はなくなった。ドイツのゴールキーパー、カーンに感謝！

2003年1月18日(土) 貴乃花

別に相撲ファンではないのだが、ここ数日6時近くなると事務所でテレビをつけて貴乃花の相撲を見る。この勇姿を見られるのも今日が最後かな、という感慨を抱いて見る。貴乃花というより最後の横綱として見る。

曙や武蔵丸が横綱としてダメだというわけではない。彼らは普通の日本人の何倍も努力をして異国で頂点に立ったのだから尊敬に値する。しかし、それとは次元の違う話なのだ。

出番を待ち土俵を見上げる貴乃花の姿にはなんとも言えない色がある。薄目を開いて、土俵ではないもっと遠くを見ているようでもあり、時々微笑がうかび、仏像のようにも見える。奇跡のように、日本の美がここにある。そして失われようとしている。

2003年1月21日(火) 貴乃花の引退

二つの「if」について考えてしまう。ひとつは、もし一昨年の夏場所、武双山戦で負傷したとき休場していれば。もうひとつは、今場所再出場せずに治療に専念したら。いずれも貴乃花は常識では考えられない決断をしたが、結局この度の引退という結果になった。これを「挑戦」と呼ぶ人もいるが、むしろ破滅に向かって突き進んで行ったように思える。葉隠的な死の美学に魅せられたかのように。

1ヶ月ほど前、たまたまNHKで貴乃花のインタビュー番組を見た。彼は、ゆっくりと、でも熱心に話し、その言葉は孤独な修行のなかで熟成した重みと味わいをもっていた。

貴乃花の最後の勝負は皮肉だった。相手は初顔の安美錦で、貴乃花の使える唯一の武器である右手を封じる作戦にでた。貴乃花の左手はほとんど動かず、木偶のように安美錦に振り回され踊らされ、送り出された。雅山の投げや出島の突進に敗れたのなら、まだ玉砕の美学があったかもしれない。しかし、現実は無残で無残だった。作り物のドラマと違って本当の悲劇はこのように

無情なものなのだろう。

昨日の引退会見を見ていて、これでよかったのかなとも思った。貴乃花にとってはこの結末も意外なものではなかったのかもしれない。そんな大きさを感じた。

2003年4月3日(木) 野茂英雄

野茂に関心を持ったのは、彼がメジャーに挑戦することを宣言してからだった。そのときのマスコミの論調は、野茂は日本球界の裏切り者でワガママなだけだというものだった。メジャーのマウンドに立てるかどうかもあやしく、3Aがせいぜいではないか、と言われていた。メジャーと日本の野球は大人と子供ほど違うと思われていた時代だった。

近鉄時代の野茂はほとんど見たことがなかったが、手に入れた安定した生活を捨てて、より高い目標にひとり挑戦するという日本人にあまりない生き方に興味を持った。

1995年5月2日の初登板は朝4時30分からBS1で放送された。自分が投げているかのように緊張して見ていたのを覚えている。そのあと長く勝てない試合が続いたが、6月2日に勝ってからは7連勝してすごかった。あの頃の野茂のフォークは大リーガーにとっては魔球に見えたようで、誰も打てなかった。バリー・ボンズなど1割も打てなかった。8月5日に1安打ピッチングをしたときアメリカの解説者が「自分が見たどんなノーヒッターよりすごかった。この男はこれから何回もノーヒッターをやるだろう」と言っていた。

3年目になると、打者も野茂のフォークを見切ることができるようになり、簡単に勝てなくなった。そして、球団を転々と移るようになり、日本人の関心もうすくなっていた。私もいいファンではなく、毎回録画していた試合も負ければ見なくなった。でも、3Aに落ちても、解雇されても、表情を変えずに投げ続ける野茂の姿は美しかった。

2002年、出発点のドジャーズに帰ってきた野茂を私も新たな期待をもって見ていた。最初のうちは勝てる試合を打線の援護がなく落とし続けた。その間石井が勝ち星を重ね、野茂の時代は終わったかのように見えた。しかし、そのとき野茂はすでに復活していたのだ。球速は落ちて三振は取れなくなったが、後半戦野茂は勝ち続けた。そこには昔の力まかせに打者を切って捨てる勇姿はなかったが、より深い味わいが出てきた。インタビューでは相変わらず無愛想で訥弁だが、彼の投げる姿は雄弁だ。

今年の開幕試合、あのランディー・ジョンソンとの対決に完封で勝った。今年はワールドシリーズで投げる野茂を見ることが出来るだろうか。

2004年1月3日(土) ボブ・サップ対曙

朝日新聞はこれまでK-1を記事としては取り上げたことがなかった。サップの特集を組んだことはあったが、スポーツとはみなさないということなのだろう。しかし、今回はさすがに無視できず社会面ではあるがサップの勝利を報じた。

試合は期待以上のもので、特に曙の気迫はすごかった。サップのローキックで曙が立てなくなるという展開かと思っていたが、すさまじいKOだった。

曙は負けたからといって弱いわけではない。曙のパンチが1つまともに当たっていたら結果は反対になっていただろう。それに、ルールが相撲だったら電車で曙の勝ちだった。

あの番組でもうひとつ注目したのはマイク・タイソンだった。彼こそ元祖野獣なのになんと紳士的！服装も日本のさえないビジネスマンのようだし、中継の下手際にもいやな顔もしないで誠実に質問に答えていた。私はそこにタイソンより強いジャパンマネーの姿を見た気がした。

2004年8月23日(月) 女子マラソン

ラドクリフの圧勝と予想したが、野口だったら勝てるかもしれないと思って見ていた。意外なことにラドクリフは脱落したが、独走する野口にヌデレバが迫ってきた。東京オリンピックの時の円谷を思い出して、またあの光景は見たくないと思った。

東京オリンピックの時私は高校生で高校から券が配られ、女子砲丸投げを見た。太ったおばさんを見たという記憶しかない。マラソンはテレビで見たが、一つの場面だけが強烈に記憶に残った。それは円谷が抜かれた瞬間だ。

鉄人アベベがゴールしてから、約2分遅れで円谷幸吉が国立競技場に入ってきた。しかし、そのすぐ後に英国のヒートリーが来た。疲れ果てた様子で後ろを振り返ることなく走る円谷にヒートリーがひたひたと迫る。そして、第3コーナーでスピードを上げたヒートリーはするすると円谷を抜き去った。その光景は、私の記憶の中ではサイレント映画のように音がない。

しばらくして、円谷はあの有名な遺書を残して自殺した。「父上様、母上様、三日とろろ美味し

ゆうございました。干し柿、もちも美味しゅうございました」で始まる遺書だ。まだ戦後が終わっていない頃、国民の期待を一身に背負った実直な自衛官が選んだ道だった。オリンピックで抜かれたことが直接の原因ではなかったのだろうが、思い出すとあの光景と自殺が重なってしまう。

あれから40年が経って、日本の若者は変わった。今回のオリンピックを見ても逆転負けは少なくなり（以前は日本選手は最後で余力がなく逆転されることが多かった）、反対に最後に抜いて勝つパターンも出てきた（女子800メートル自由形の柴田亜衣とか）。負けた連中もそれほど悲愴感はないだろう。負けても競技を楽しんだと言って批判されたシドニー大会の女子競泳陣の精神がいい方向で生かされているようだ。

2006年8月21日(月) 高校野球

昨日はめったに見ない高校野球を見た。駒大苫小牧と早稲田実業の15回引き分け再試合となった熱戦で人並みに感動した。でも、疑問が残った。

なぜ高校野球では、3連投、4連投を許すのだろうか。プロ野球では、中4、5日が当たり前で連投など考えられない。連投をすれば投手は肩を壊して寿命が短くなるからだ。その理屈が高校野球にも当てはまらないわけがない。むしろ、高校生は身体が出来上がっていないから、その時期に過剰な負担を与えれば影響はより大だろう。

では何故そのような無茶をさせるのか。トーナメントである以上連投も仕方がないということか。そうであっても、健康に配慮してある回数以上の連投を禁止するルールを作ることはできるだろう。しかし、そんな動きはないようだ。むしろ、世間は早実斉藤の4連投を見たがっている。ローマのコロッセオに集まってライオンが奴隷を食い殺すところを見る連中のように。アマチュアリズムの負の部分と日本人の集団ヒステリーが合わさるとこのような異常なことが起こる。

プロとアマの違いとはなにか。技術の差であると誤解する人がいるが、そうではない。プロは金をもらって仕事をする人で、アマチュアは金をもらわないで仕事をする人なのだ。だから人は、プロ野球選手が連投を拒否し自分の商品価値を維持しようとすることに理解を示す。プロは、もらう金の分だけ仕事をすればいいのである。アマチュアの場合には、プロにとっての金のように仕事の量や程度を画する限界が存在しない。反対に金から切り離されることによって、アマチュアの仕事は神聖化され、それに対する献身が要求されるようになる。

今日の試合で斉藤が肩を痛めて選手生命が短くなったら誰が責任を取るのだろうか。日本の常で、誰かが致命的な損害を負うまで誰も何もしないのだろうか。

私は、再試合は1週間後の日曜日にすればいいと思う。15回を投げた次の日に9回投げろというのは気違い沙汰だろう。まだ延長を続けた方が一回で終わる可能性があったからよかった。

2009年1月24日(土) 朝青龍と気

朝青龍は昨日までで13連勝している。今場所はどうか気になったので朝青龍の取り組みは全部見ている。

続けて見ていて感じたのはどんどん安定感が出てきているということで、昨日の千代大海戦はそれがはっきり分かった。千代大海の鋭い当たりをほとんど下がることなく受け止めていた。土俵に根が生えているという表現がぴったり当てはまる。

初日の稀勢の里のときはいっぺんに土俵際までもっていかれ危なかった。それと比べると昨日は体重が倍になったように動かなかった。

大東流合気柔術の中興の祖といわれる武田惣角は自在に自らの体重を変えられたという。弟子たちに自分を持ち上げさせ、それから体重を増していく、すると弟子たちは惣角の体重に押しつぶされてしまうと。

朝青龍の今場所の変わりかたは常識を超えたものなので超常的な何かが関わっているかもしれない。しかしそんな超能力を使えるのなら初日からやらなかったのはおかしいと思うが。

琴欧洲戦もその意味で興味深かった。それは勝負が決まってからのこと。朝青龍は転んだ琴欧洲の頭の上で大きく左腕を振った。それを朝青龍がよくやるダメ押しの技と思ったテレビの解説者がいたが、多分30センチ以上外れていたのではそれはない。さらに不思議だったのは琴欧洲が勢いよく土俵を飛び出していったこと。それほど強烈な投げ技ではなかったのに。

私はあれは気で押したのだと思った。西野流呼吸法の対気では気で人を飛ばす。指導員に飛ばされた塾生のなかには壁際のマットに当たった後はね返って部屋の反対側のマットに向かって走る人が最近多い。それを手を振って気で押す指導員がいる。ちょうど朝青龍がやったようなしぐさで。気を受けた塾生はさらに勢いをつけて走る。

本当のところは分からないが、気は存在するし、格闘技とは深い関係がある。今日、明日の取り組みが楽しみだ。

2009年3月26日(木) WBC対韓国決勝戦

決勝打の前に、イチローは打席に入っている自分を実況していたと。イチローほどの達人になると無の境地で雑念などないかと思ったが、逆だったようだ。

西野流呼吸法には対気という武道の組手に対応するものがある。相手と手を合わせて気の交流をするのだが、現象としては強い気が弱い気を飛ばすことになる。

初心者は手で押すので、手を意識するようになり、指導員から丹田を意識するように注意される。しかし丹田を捉えるのは簡単ではない。

私は、試行錯誤の結果、正中線（身体の中心線）と足芯（足の裏の中心）を意識して、身体全体をぼんやりと捉えることができるようになった。もっと上達すると身体自体を意識しなくなるようだが、想像を絶する。

西野流では、集中と緊張は禁物で、身体が弛んでいないと気が出ない。

さて、イチローのことに戻るが、実況していたということは、自分を外側から見ていたことになる。ちょうど幽体離脱のように。

そのとき、打席にいるイチローは客体であり、自意識は持たない。身体に緊張をもたらす自然な動きを妨げるのは自意識の働きだから、イチローの「実況」は自意識から身体を解放する効果があるのかも知れない。

2009年10月26日(月) 野村楽天最終戦

楽天が負ければ日ハムの日本シリーズ出場が決まり、野村監督の楽天における最終戦になってしまう一戦だった。

8回裏、楽天の2点ビハインド、二死2，3塁、投手交代で岩隈の名前が告げられた。それまで楽天側の動向には反応が鈍かった日ハムファンに埋められたスタンドがどよめいた。ドラマのクライマックスが演出された。

スレッジに対する岩隈の第一投は大きく外角高めに外れた。8回投げて、一日おいてのリリー

フだった。

次の投球はストライクゾーンに入る速球で、打った瞬間に分かる豪快なホームランになった。

大歓声の中、カメラはベンチの野村監督を捉えた。野村は笑っていた。次の映像は、駆け寄る捕手と話す岩隈だった。岩隈も笑っていた。

二人の笑顔には共通点があり、すがすがしさを感じた。

野村も岩隈も無理があることは判っていたのだろう。わずかに在った希望が3ランホームランの前に消え、運命が確定する。

そのときの気持ちは安堵に近いのではないか。未練に引導を渡すホームランだった。これが四球やエラーで崩れたのだったら、爽快感はなかっただろう。

人生には色々な局面での最後があるが、うまく気持ちの区切りをつけることは難しい。

野村の胸中には、岩隈で負ければあきらめがつく、という思いがあったのではないか。勝つための作戦としては無理があった。それでも岩隈を選んだのは、心中に近い感情かもしれない。

自分にとっての最後の試合で最後のマウンドに立つ投手を野村は指名した。その役割を岩隈は立派に果たしたと思う。

2010年2月6日(土) 朝青龍引退と労働基準法

「朝青龍は引退させられたが、なぜ小沢一郎は引退しなくていいのか？」

「それは、横綱には品格が要求されるが、政治家には品格は必要ないからだ」

という問答がある（笑）

それはともかく、横綱の品格について考えてみよう。

朝青龍の引退記者会見を見ていて印象に残ったのは、マスコミ報道の行き過ぎについて、「それでメシを食っているんだから」と理解を示したことだった。そこには、自分も相撲でメシを食っているのに何でこんなことで辞めなければいけないのか、という無念がにじみ出ている。

今回の「引退」は横綱審議委員会が引退か解雇かと迫った結果だったとのこと。では、もし朝青龍が引退を選ばず解雇されていたらどうなったか。

朝青龍は賃金をもらって生活しているので、労働基準法にいう「労働者」である。労働基準法は不当な解雇から労働者を保護していて、正当事由のない解雇は無効になる。社風に合わないから解雇するなどということは認められない。今回のような、仕事外の仲間内でのケンカも普通は解雇事由にならない。

そこで問題の「横綱の品格」が登場する。何をもって横綱の品格の有無を判断するのか明確でない。書いたものがあるわけではなく、昔の大横綱はこうだったなどと伝説のようなものを持ち出す。

例えば、土俵上のガッツポーズについては賛否両論があった。それは双葉山の時代には無かっただろうが、時代は変わっている。規範が明確でないのに違反であるということは出来ない。日本人にも分からないものを外国人に押し付けるのは不当だ。

百歩譲って、「横綱の品格」という概念を用いて朝青龍の言動を批判するのは自由だとして。しかし、だからと言って人の職を奪っていいわけではない。罪刑法定主義と同じ理由で、職を奪うためには何をすればそのような結果になるかが事前に本人に知らされていなければならない。

モンゴルでは、今回の出来事について、日本を非難する声があるという。当然である。外国人力士をこれだけ受け入れて金儲けをしている相撲協会は、誰にでも分かるルールを定めるべきである。ルールがないのに罰を科すような国は文明国とは言えない。

日本人が「横綱の品格」という言語化できない独特の美意識で外国人を批判するのと、それで外国人の職を奪うのとは全く次元が違う行為なのだ。大日本帝国が「八紘一宇」などという思想でアジアを従わせようとしたのと同じ愚である。